

葵 AOI

No.136

令和7年 秋

徳川美術館

THE TOKUGAWA ART MUSEUM



展覧会紹介①

P3~4

秋季特別展

尾張徳川家 名品のすべて

記念寄稿

P2

90周年を迎える徳川美術館、
そして100周年へ
館長 徳川 義崇

展覧会紹介②

P5

蓬左文庫の名品とその歩み

エッセイ

P6

パリの源氏物語絵巻

京都先端科学大学 国際学術研究院教授
平安文学研究者

山本 淳子氏

特別寄稿

P7

再興期の徳川美術館

徳川美術館 参与

山本 泰一

展覧会紹介

P8

特別展「国宝 源氏物語絵巻」
企画展「尾張家臣団」



90周年を迎える徳川美術館、 そして100周年へ

昭和10年(1935)11月10日に開館した徳川美術館は、今年90周年を迎えます。これまでお力添えいただきました方々、ご寄付をいただいた方や作品をご寄贈いただいた方、運営に関与いただいた方、美術館の運営が厳しい時代にお助けいただいた方々はもちろんのこと、ご来館者、美術館の各種行事に参加いただいている方、ミュージアムグッズを購入してくださる方、ボランティアの皆様といった、徳川美術館の活動に御参加いただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。

多くの苦難を乗り越えてたどり着いた90周年ではございますが、振り返るばかりでなく、未来も見据えていかななくてはなりません。100周年に向けて数多くの課題がございます。

建設から90年を経た本館はもちろんのこと、新館も建設から35年を過ぎ、計画的なメンテナンスのみならず突発的なトラブルへの対応も必要になってきています。そしてその美術館内に納められた美術品は建物よりはるかに古く、一つ一つのかげがえのない所蔵品に対して、最新の研究成果をもとに最善の保存・修復方法を採用していく必要があります。

文化財の保護に多大なる時間と費用がかかることは曾祖父・義親もよく理解していたからこそ財団を設立したと思いますが、残念ながら現在の財団にすべての美術品の保存状態にきめ細かに対応できるほどの十分な資金力があるわけではありません。今後も多くの企業や個人の方々にご支援をお願いしなくてはならないと考えています。

そして、徳川美術館をとりまく世界は90年前から

館長 徳川 義崇



大きく変化しました。開館当時は尾張徳川家の宝庫を開くだけで画期的であったのですが、今や世界に向けて、将来に残すべき至宝1万件超の所蔵品の存在を積極的に発信していく必要があります。国内外問わず多くのお客様をどのようにお迎えし、ご満足いただけるおもてなしはどんなものなのか日々職員とともに試行錯誤を続けています。その一方で、90年間かたくなに守り続けてきたものもあります。19代義親が残した「美術館の開館を完成とは考えず、さらなる理想像に向けて継承していく」という運営姿勢です。

曾祖父が築き、祖父・父が守り発展させてきた事業形態や運営方針を、踏襲すべきは踏襲し、改めるべきは改め、100周年の年にあっても、盤石な基盤のもと健全なる運営をおこなう徳川美術館でありたいと思っております。

90周年に当たり、今年の徳川美術館の展示は、「国宝 初音の調度」にはじまり、「時をかける名刀」、「尾張徳川家 名品のすべて」、「国宝 源氏物語絵巻」と名品展が続きます。ぜひご来館いただき、ご観覧いただきますと共に、今後とも重ねてのご支援・ご協力を頂戴いたしたく、お願い申し上げます。

徳川美術館・蓬左文庫開館90周年記念 秋季特別展

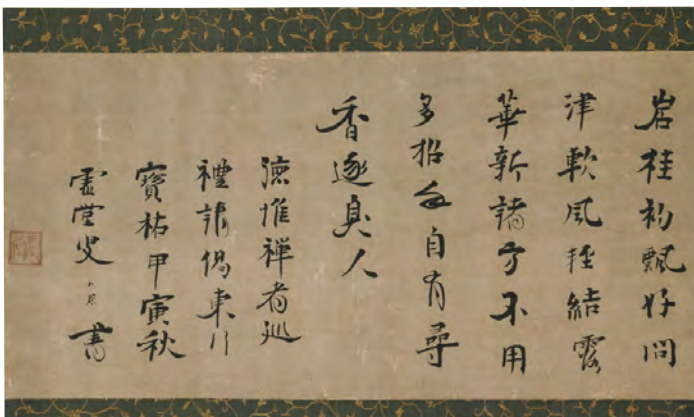
尾張徳川家 名品のすべて

令和7年9月13日(土)～11月9日(日)

[前期] 9月13日(土)～10月13日(月・祝)

[後期] 10月15日(水)～11月9日(日)

令和7年(2025)11月、徳川美術館と蓬左文庫は開館90年を迎えます。昭和10年(1935)、徳川美術館は名古屋で開館し、蓬左文庫は東京目白の尾張徳川家邸内に開館しました。そののち、蓬左文庫は同25年(1950)に名古屋市に移管されました。ともに御三家筆頭であった尾張徳川家の収蔵品を守り伝える施設として、類いまれな文化財とそれらに息づく大名文化を、地域と世界、そして未来へ伝えていく役割を果たすべく、活動を続けてきました。本展では、館蔵品の中から、重要文化財を含む名品を主として、昭和から令和にいたる90年の歩みを物語る関連資料を交え、徳川美術館と蓬左文庫の豊饒なコレクションをご紹介します。



図① 重要文化財 虚堂智愚墨蹟「与徳惟禅者偈」 大名物 南宋時代 宝祐2年(1254) 北向道陳・細川幽斎・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)ほか所持 前期展示



図② 蒔田蒔絵小鼓胴 御家名物 室町時代 16世紀 豊臣秀頼・徳川義直(尾張家初代)所用 前期展示

本展は三部構成で、徳川美術館名品コレクション展示室・名古屋市蓬左文庫展示室・徳川美術館本館展示室の、すべてが会場となります。各室が、順に第一部「大名文化とその名品」、第二部「蓬左文庫の名品」、第三部「徳川美術館の名品とその歩み」となります。こちらでは第一部と第三部について、ご案内いたします。

第一部「大名文化とその名品」では、5つの展示室から大名文化を物語る名品をご紹介します。第1室では大名家の表道具の筆頭である武具・刀剣類、さらに根強い人気を誇る「徳川家康画像(しかみ像)」(前期展示)を公開いたします。第2室では元和9年(1623)の2代将軍徳川秀忠の御成を迎えた際の茶室での道具の取り合わせを再現し、「^{き どう ち ぐ ぼく せき}虚堂智愚墨蹟 ^{とく い ぜん しゃ に あ た ふ る げ}与徳惟禅者偈」(図①)をはじめとする茶の湯道具の名品をご鑑賞いただけます。第3室では、伝無準師範筆・同賛「^{だる ま い く さん し ゅ せい こ う}達磨・郁山主・政黄牛図」(大名物。重要美術品。後期展示)ほか、御成の際に座敷を飾った道具を展示いたします。第4室では、「蒔田蒔絵小鼓胴」(図②)などの能道具や能装束の名品、第5室では、屏風や絵巻をはじめとする奥道具の名品をご覧ください。



重要文化財 天皇摂関御影 二巻の内 上巻(部分) 鎌倉時代 14世紀 後期展示



図③ 重要文化財 豊国祭礼図屏風 岩佐又兵衛筆 六曲一双の内 左隻 江戸時代 17世紀 阿波蜂須賀家伝来 後期展示

第三部「徳川美術館の名品とその歩み」では、宗教美術や家康の衣服といった、まとめてご覧いただく機会が少ない作品群から、徳川美術館のコレクションの幅広さをお伝えするとともに、徳川美術館が開館して以降の歩みをご紹介します。また、本展での特別展示として、開館当時の写真アルバムや本館の建設のためにつくられた史料などから、往時を振り返ります。そして、岩佐又兵衛筆「豊国祭礼図屏風」(図③)をはじめとする、徳川美術館の開館のために購入した作品や、昭和40年(1965)にご寄贈いただいた岡谷コレクションを筆頭とするご寄贈品から、名品の数々が一堂に会します。

国宝「初音の調度」や「源氏物語絵巻」、国宝の刀剣類は別の展覧会での公開となりますが、なお余りある名品の数々をお愉しみいただけましたら幸いです。
(学芸員 加藤 祥平)



重要文化財
黒織部筒茶碗 銘 冬枯
江戸時代 17世紀
岡谷家寄贈 通期展示

展覧会紹介 「尾張徳川家 名品のすべて」展 第二部

蓬左文庫の名品とその歩み

会場：名古屋市蓬左文庫展示室

名古屋市蓬左文庫は、名古屋城内の書物蔵「御文庫」に収められていた尾張徳川家旧蔵書をはじめとした古典籍・歴史資料を所蔵・公開している文庫です。徳川美術館と同じく徳川黎明会の機関として昭和10年(1935)に東京・目白で開館し、昭和25年(1950)に名古屋市に移管されました。以降、郷土の蔵書家のコレクションも加わり、現在約7万8千件、14万点の蔵書数を誇ります。

本展では蓬左文庫の90年のあゆみを振り返りながら、選りすぐりの名品を紹介します。



張州雑志 内藤東甫編 100冊の内
江戸時代 18世紀 名古屋市蓬左文庫蔵



銅人腧穴鍼灸図経 10冊の内
明時代 17世紀 名古屋市蓬左文庫蔵

尾張藩による編纂書

尾張徳川家初代義直は、書物を蒐集するだけでなく自ら主導して編纂も手がけました。全国の由緒ある神社の祭神を古代史の文献に基づいて考証した『^{じんぎほうてん}神祇宝典』はその成果の一つです。

江戸中期以降、藩政の基本となる地誌類の編纂が活発になりました。江戸時代の尾張一帯の地形・産物・自然・文化等を研究する上で特に重要な資料の一つ、^{ないとうどうほ}内藤東甫が記した『^{ちやうしゅうざつし}張州雑志』は、御秘書として扱われるほど、非常に精緻な地誌として評価されています。

近年の研究活動

御文庫創設期に架蔵されたと考えられている鍼灸医学書『^{どうじんしゅけつしんきゅうずけい}銅人腧穴鍼灸図経』の拓本は、国内では2件しか確認されていないもののうちの一つです。また、裏面に貼られた文書は中国・明時代の行政文書で、本国でもほとんど類例がない貴重なものです。これまであまり注目されてこなかった資料ですが、現在、大学等研究機関と連携して研究を進めており、明日の「名品」となることでしょう。

なお、蓬左文庫の重要な蔵書である「金沢文庫本」については、年度末に別立ての展覧会にて紹介します。記念すべき90周年の今年度は、年度を通じて展覧会へ足をお運びいただき、蓬左文庫の名品と、コレクションの豊かさを体感していただきたいと思っています。（名古屋市蓬左文庫学芸員 星子 桃子）

駿河御讓本と漢籍

徳川家康は、文治政治推進のために古典籍を積極的に蒐集していました。家康の歿後、その蔵書は将軍家及び御三家（尾張・紀伊・水戸）に譲り渡され、「駿河御讓本」と呼ばれています。尾張藩分の御讓本は漢籍（中国や朝鮮で作られた本）が大半を占めており、出版地である大陸ではすでに失われ、世界で唯一蓬左文庫のみ伝存している貴重なものもあります。今回は朝鮮王朝の舞楽に関する書物『^{がくがくきはん}楽学軌範』や宮中に仕える女性の心得を説いた書物『内訓』など朝鮮本を中心に紹介します。

御讓本以外にも蒐集・献納によって優れた漢籍がもたらされており、『^{しつかい}高麗史節要』・『論語集解』はいずれも重要文化財に指定されています。



重要文化財 論語集解 10巻 10冊の内
南北朝時代 元応2年<1320> 神村忠貞旧蔵書 名古屋市蓬左文庫蔵

パリの源氏物語絵巻

2025年秋、徳川美術館で国宝「源氏物語絵巻」が一挙公開される。『源氏物語』そのものと響き合い深い精神性を感じさせる日本の至宝。それが昨年、遠いパリでも熱い視線を浴びていた。

少し前のことになるが、2024年3月、パリの国立ギメ東洋美術館で開催された『源氏物語』特別展のために渡仏した。笹川日仏財団と美術館が共催した「À la cour du Prince Genji 1000 ans d'imaginaire japonais(皇子源氏の宮廷へ——一千年の日本の想像力)」である。

私の仕事は展示に合わせて企画された講演で、詩人の高橋睦郎氏、平安文学研究者の河添房江氏、作家の角田光代氏と共に登壇した。高橋氏の講演は「日本 平安時代 源氏物語 そして歌」、河添氏は「『唐物』から読み解く『源氏物語』」、角田氏は『角田光代訳 源氏物語』について私との対談形式で、私は「光源氏の〈光〉」と題して、ほぼ一日をかけてのリレー講演会だった。いずれの内容も高い専門性を持ち、下世話な話だが聴講は有料である。そう多くの数の来聴者は望めまいと私は思っていた。ところが、そうではなかった。予約制の席はほぼ満席となり、会場からは質問の手が幾つも上がった。私は思いがけなくもフランスの人々の日本文化に対する熱いまなざしを実感することになったのである。

思えばその前日、イベント前に展示を拝見した時に、館長から告げられていた。前年11月に始まった当展示は3月初旬段階で入場者数が8万人超、ギメ美術館では記録的な数にのぼったと。実際、館の入り口では寒空の下で開場を待つ人々の列を目にしていた。ロビーには小学生くらいの子もたちが楽し気に並んでいた。そして会場は若い人たちでいっぱいだった。

実は今回の展示の中心は、西陣織の人間国宝・山口伊太郎氏(1901~2007)の制作監修による「源氏

京都先端科学大学 国際学術研究院教授
平安文学研究者

やま もと じゅん こ
山本 淳子



『源氏物語』作者・紫式部の人生と作品、またその時代背景となった一条天皇の時代を、主な研究対象としている。

京都大学大学院人間・環境学研究科修了。博士(人間・環境学)。2007年、『源氏物語の時代 一条天皇と后たちのものがたり』(朝日新聞出版)でサントリー学芸賞受賞。2015年、『平安人(へいあんびと)の心で『源氏物語』を読む』(朝日新聞出版)で古代歴史文化賞優秀作品賞受賞。著書は受賞作のほか、『紫式部日記 現代語訳つき』(角川ソフィア文庫2010年)『枕草子のたくらみー「春はあけぼの」に秘められた思い』(朝日新聞出版、2017年)『紫式部ひとり語り』(角川ソフィア文庫、2020年)『道長ものがたり』(朝日新聞出版、2023年)など多数。

物語錦織絵巻」だった。氏は70歳の時から西陣織での「源氏物語絵巻」復刻制作に挑戦し、「竹河」など四巻分が氏の没後の2008年に完成、西陣織工法の祖であるフランスに敬意を表してギメ美術館に贈られていた。今回はその2009年以来の公開だったのである。展示では絹糸の染色にまで遡って諸々の技術も紹介され、繊細優美さに人だかりができていた。ファッションの都パリの熱量が伝わる。来場者たちは『源氏物語』をめぐり、その最高の可視化作品である「源氏物語絵巻」の図柄と、それをさらに工芸化した「源氏物語錦織絵巻」とを味わうことができたのだった。千年をまたぐ知と美の連携である。

加えて別の階では、今回新たに『源氏物語』の漫画が制作され、大胆にも壁面から床面全体を覆ってレイアウトされていた。聞けばヨーロッパ在住の漫画家の手によるという。吹き出しに書かれた言葉はもちろんフランス語だが、内容も登場人物の心情も理解できた。この絵にもやはり、物語を可視化する意欲がみなぎっていた。

時を超え場所を超え『源氏物語』でつながる旅だった。あれ以来、パリにも「源氏物語絵巻」があると思うと胸が熱くなる。

再興期の徳川美術館

山本 泰一（徳川美術館 参与）

徳川美術館が今日あるのは、尾張徳川家19代義親^{よし ちか}の先見の明にあったことは言をまちませんが、また21代義宣^{よし のぶ}の奮闘なしには存続が危うかったことも事実です。

昭和20年の敗戦による金融資産の無価値化により、財政が疲弊した財団は、同25年、東京・目白にあった蓬左文庫の書籍を名古屋市へ譲渡し、さらに収蔵品の売却などにより危機を凌ぐしかありませんでした。

同30年に20代義知^{よし とも}の養子となった義宣（当時22歳）は、同37年、美術館担当理事として改革に乗り出します。

収蔵品の展示を基本としてきた方針を改め、趣旨にあわせて外部からも作品を借用する展示を行い、さらに国内各地の公私立館や百貨店のみならず、欧米の博物館など館外での展示会も積極的に開催しました。私立館が海外展を単独開催するのは他にないことでした。（挿図は海外展図録）

義宣は『徳川美術館の特性と使命』（昭和53年）の中で「徳川美術館の存在意義を国内外に明らかにし、その社会的国際的要請に応へ全うしていくためには、調査研究を事業の原動力とし、保存・展示・指導・刊行等あらゆる博物館事業を系統的に推進し、同時にそれを可能たらしめる様な博物館施設、建造物・附属設備・庭園等の整備拡充に努めなければならないこと明らかであらう」と述べると共に、施設整備39案件を計画（昭和38年）し、整備拡充に熱意を傾けます。

バックヤードなので一般の方々の目に触れませんが、昭和50年完成の新収蔵庫はその一つです。本館収蔵庫は戦後、尾張徳川家より多数の什宝の追加寄附があったこともあり、筆者が就職した同46年には、棚に収まりきらない収蔵品が通路にはみ出しており、保存に良くないため増設が急務でした。そこで自己資



昭和52年 アメリカ開催「徳川コレクション 能装束と能面」展 図録



左：平成元年 カナダ開催「徳川家コレクション—将軍治世下の日本」展 図録

中：昭和58～60年 アメリカ・ドイツ・フランス開催「将軍の時代」展 図録

右：昭和45～46年 イタリア・ドイツ開催「能 装束と面」展 図録

金の他に日本船舶振興会（現・日本財団）の補助金を得て、本館収蔵庫より約1.5倍の床面積のある新収蔵庫を完成させます。

本館には講座や講演が行える来館者向けの施設や学芸員室・研究室・図書室などありませんでしたが、昭和58年に日本船舶振興会と日本自転車振興会（現・公益財団法人JKA）の補助金を得て増築しました。

同年、名古屋財界より整備拡充に助力し、地域文化の核としたいとの申し出があり、愛知県・名古屋市はじめ多くの団体・企業・個人の方々より27億円余のご芳志が寄せられ、義宣が「夢」としていた大名の生活の場を再現して「構成の美」を展示する、空間展示方式による新館展示室が、昭和62年に完成します。私立館の増改築が多くの方々の御寄附により竣工したのは、我が国では初めてのことです。昭和38年に掲げた計画はこれにより24年の歳月をかけてほぼ達成されたのでした。

開館90周年記念特別展

「国宝 源氏物語絵巻」

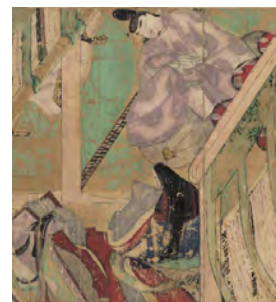
今秋、10年ぶりに
一斉公開

令和7年11.15(土)～12.7(日)

今からおよそ千年前、紫式部が著した古典文学の傑作『源氏物語』は、後世の文学や芸能に大きな影響を与え、数多くの美術工芸品を生み出しました。なかでも国宝「源氏物語絵巻」は、『源氏物語』を平安時代後期・12世紀に絵画化した現存最古の絵巻にして最高峰の名品です。物語への憧憬と深い理解に基づき、貴族たちの雅やかな暮らしが物語の情景とともに格調高く描き出され、情趣に富んだ優美典雅な世界観や登場人物の心情に迫る表現は他の追随を許しません。金銀の砂子や切箔をちりばめ、染めや雲母摺りをほどこした美しい装飾料紙に、流麗な筆



国宝 源氏物語絵巻 鈴虫 (二) 絵
平安時代・12世紀 五島美術館蔵



国宝 源氏物語絵巻 柏木 (三) 絵 部分
平安時代・12世紀 徳川美術館蔵

跡でしたためられた詞書とともに、王朝貴族の美意識を凝縮した美の結晶ともいえるでしょう。

額装から本来の卷子装へと修理・改装された弊館の所蔵品に加え、東京・五島美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」や諸家蔵の断簡類、平成復元模写を含め、開館90周年を記念すべく、今秋、名古屋の地で一堂に公開します。

徳川林政史研究所連携企画 企画展

「尾張家臣団」

令和7年11.15(土)～12.14(日)

徳川御三家の一つとして、將軍家に準ずる家格を有していた尾張徳川家には、18～19世紀の段階で実に25,000人の家臣や陪臣^{ばいしん}たちがいたとされています。

このうち、初代將軍徳川家康から尾張徳川家当主の補佐を命じられた成瀬家^{たけのこし け}・竹腰家、関ヶ原の戦いの功勞により取り立てられ、木曾や伊那の地を治めた山村家・千村家、在地武士の由緒を持つ兼松家・横井家などは、直属の家臣として長く尾張徳川家を支えました。また、身の回りで起きた事件や日常生活を赤裸々につづった朝日文左衛門、領内の様子を記



尾張家臣双六 徳川慶藏(尾張家13代)筆
江戸時代 19世紀 徳川美術館蔵



脇指 銘 来国光(徳川家茂佩刀) 鎌倉時代 14世紀 個人蔵

録・絵図に残した内藤東甫^{とう ぽ}など、家臣たちのなかには個性的な人物も現れ、彼らによってさまざまなエピソードが後世に伝えられています。

本展では、このような尾張徳川家に仕えた多様な家臣たちの姿を、古文書や絵図、武具などの歴史資料から迫ります。さらに、戦前に財団法人尾張徳川黎明会の専務理事を務め、自身も尾張徳川家家臣としての由緒を持つ鈴木信吉の家に伝来した、14代將軍徳川家茂の指料「脇指 銘 来国光」も、本展に合わせて特別公開いたします。

葵 徳川美術館 第136号

発行年月日：令和7年10月1日

編集発行：徳川美術館

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1017

TEL(052)935-6262

<https://www.tokugawa-art-museum.jp/>

表紙

重要文化財 紫地葵紋付葵の葉文辻々花染羽織

桃山～江戸時代 16-17世紀

徳川家康・徳川吉通(尾張家4代)着用 徳川美術館蔵

紫地に、三色の二葉葵の大柄な文様を散らした華やかな羽織である。縫い紋りによるおおらかな葵の葉の表現と、引き締まった葉柄の線にみられる繊細さなど、染色技巧を余すところなく駆使した、家康の辻々花染の衣服を代表する一領である。このほか、徳川美術館には家康の辻々花染の衣服が7領伝わる。

